

殷の酒器と醴の祭祀

石谷 慎

1. 序論 一般の酒と酒器をめぐる研究

殷王朝は、「祭儀国家」と言われる。また、最後の王・紂王の「酒池肉林」で知られるように、「酒の王朝」というイメージがある。たしかに、しばしば祭政一致という語で説明されるように、殷王朝では政治が祭祀という形態をとって行われた（松丸 1970）。その祭祀において用いられた酒は、殷王朝を理解するためのひとつのキーワードである。

『礼記』明堂位に「夏后氏は明水を尚び、殷は醴を尚び、周は酒を尚ぶ」（「夏后氏尚明水、殷尚醴、周尚酒」）と記されることから、一般に殷は「醴」、周は「酒」を重んじたと言われる。また、『周礼』大宗伯・吉礼「以肆献裸享先王、以饋食享先王」の漢・鄭玄の注によれば、「肆」とは解体した犠牲、「献」とは醴を献じること、「裸」とは鬱鬯を以て灌する（地に注ぐ）ことという。殷人が尚んだ「醴」が先王に献じられたことのほか、先王を降臨させるために地に注がれる「鬱鬯」もあったと知られる。では、「醴」や「鬱鬯」と呼ばれる酒は具体的にどのような酒であったのだろうか。

「醴」とは、漢・許慎の『説文解字』に「酒の一宿にて孰するものなり」（「酒一宿孰也」）とあり、清・段玉裁が『周礼』酒正注を引いて言うように、一晚で熟成した汁と滓（粕）とが混ざって甘味ある「恬酒」のごとき酒である⁽¹⁾。内田純子も、最初に出現した酒器が温酒器の爵であることや民俗例を根拠に、温めて飲む甘酒の類と考えている（内田 2023）。花井四郎は、『尚書』説命の「若し酒醴を作らば爾惟れ麴蘖」（「若作酒醴、爾惟麴蘖」）から「酒」を麴酒、「醴」を蘖酒と考え、さらに『説文解字』の「蘖は牙（芽）米なり」（「蘖、牙米也」）をふまえ、「醴」は発芽した穀物からつくられた今日のビールに相当するものと考えた（花井 1992）。そして、神事にかかわる蘖づくりを祈年祭を挙げる冬季に行うと想定し、気温の低いときの蘖でつくった醴はアミラーゼと糖分の生成量が少ないため、味がうすくアルコール分が低かったと推測している。

ところで、段玉裁が引く『周礼』酒正注（鄭注）のおおもとである『周礼』酒正には、「酒の政令を掌り、式法を以て酒材を授く。凡そ公酒を為る者も亦た之の如し。五斉の名を辨ずるに、一を泛斉と曰い、二を醴斉と曰い、三を盎斉と曰い、四を緹斉と曰い、五を沈斉と曰う」（「掌酒之政令、以式法授酒材。凡為公酒者、亦如之。辨五斉之名、一曰泛斉、二曰醴斉、三曰盎斉、四曰緹斉、五曰沈斉」）とある。祭祀において献じられる「醴」とは、五斉のひとつの「醴斉」を指していると知られる。

「醴斉」とは、『周礼』司尊彝に「醴斉は縮酌なり」（「醴斉縮酌」）、『礼記』郊特性に「縮酌に茅と明酌を用いるなり」（「縮酌用茅・明酌也」）、その鄭注に「明酌は事酒の上なり」（「明酌者事酒之上也」）というように、茅と明酌（事酒の上澄）を用いて濾過し、粕を漉して祭祀に供せられた酒である。「斉」

とは原料の配合の相違であり、「醴齊」はどろっとしたものからさらっとしたものの順に並ぶ五齊のうちの二番目である（林 1984b）。

一方、「酒」は『説文解字』に「酉は就なり。八月に黍成りて、酎酒を為る可し」（「酉、就也。八月黍成、可為酎酒」）とあり、『釈名』に「酒は酉なり。之に米麴を醸し、酉にて釈すること久しくして味美なり。亦た蹴と言うなり。能否皆強め、相蹴待して之を飲むなり。又口に入れて之を咽び、皆其の面を蹴するなり」（「酒、酉也。醸之米麴、酉釈久而味美也。亦言蹴也。能否皆強相蹴待飲之也。又入口咽之、皆蹴其面也」）と解されるように、麴で造る秫酒や黍酒である（花井 1992）。「麴」は『釈名』に「朽なり。之を鬱して衣を生じ朽敗せしむるなり」（「朽也。鬱之使生衣朽敗也」）とあるように、コウジカビの類である。

その「酒」の一種に、「鬯」がある。『説文解字』に「鬯は秬を以て郁草（鬱草）を醸すること芬芳攸服（條暢）にして、以て神を降ろすなり」（「鬯、以秬釀郁草、芬芳攸服、以降神也」）と解されるように、秬（くろきび）の酒に鬱金の汁を加えた薬種の一種で（花井 1992）、「秬鬯」とも呼ばれる。内田氏は、『周礼』鬱人「凡祭祀賓客之裸事、和鬱鬯、以実彝而陳之」の鄭注に「築鬱金煮之、以和鬯酒」とあり、また甲骨文字の「鬯」字が濾過器で酒を濾過する形状であることを根拠に、「鬯」はたんに濾過した黒黍の酒の可能性があり、鬱金で香りづけした酒とは別物であるという（内田 2023）。『詩経』大雅・江漢に「爾に圭瓚と秬鬯一卣を釐う」（「釐爾圭瓚、秬鬯一卣」）とあり、江蘇省丹徒県煙墩山発見の西周前期の「宜侯矢」簋（中国国家博物館蔵）銘に、虔侯矢の宜侯任命に際し「鬯一卣」を賜ったと見られるように、鬯の保存には卣が用いられたと考えられ、西周前期の河南省鹿邑県長子口墓出土の卣内に残されていた透明な液体からは酒の香りがしたと報告されている（河南省文物考古研究所ほか 2000）。やはり「鬯」は純粋な黒黍の酒で、卣はその保存に使われたと見るべきだろう。

以上より、「醴」とは穀芽を一晩で熟成した蘖酒であり、明酌で濾過し粕をいくらか取り除いた状態で祭祀に供せられ、一方の「酒」とは麴を繁殖して造った秫酒や黍酒の一種で、濾過した黍酒を鬱金で香りづけした鬱鬯は祭祀において先王を降臨させるために地に注がれたと知られた。内田氏の研究によれば、二里头期に現れる土器の大口尊や二里岡期の銅尊が骨柶で醴を挹むに適して口を大きく開いた形であるのに対し、口が窄まり蓋のついた卣は酒精度の高い酒を保存するのに適した容器であり、醴の祭祀に用いられる尊・罍・觚・爵のセットが卣や扁壺など清酒用の容器に地位を取って代わられる殷墟二期が祭礼面の画期であるという（内田 2013）。『礼記』明堂位に「殷は醴を尚び、周は酒を尚ぶ」と記される祭祀に供する酒の変化は、実際には殷墟二期を境に生じたようである。

ただし、青銅酒器の組合せの変化をそのまま祭礼の画期と捉えてよいだろうか。例えば、二里岡遺跡で出土した多数の陶片内部に粘りついていて白色水錆状の沉淀（沈殿）物や（河南省文化局文物工作队 1959）、藁城台西遺跡の洹北二期並行の釀酒工房（F14）出土の大陶甕内で発見された重さ 8.5 kg の灰白色水錆状沉淀物は（河北省文物研究所 1985）、培養された酵母と見られている（張 1994）。これらは殷代前期～中期にすでに高度な釀酒技術を有していた証拠であり、当該時期の陶大口尊や銅有肩尊でも醴のみならず酒が釀造された可能性を否定できない。

同じように、西周前期の卣に酒を保存した実例があるからと言って、卣が出現当初から酒の保存専用の器であったとは限らない。これには、卣の出現と卣中心の組合せの成立の時期差も問題となる。殷墟二期を「醴」の儀礼の衰退期と見る内田氏の考えには首肯するが、「醴」の儀礼から「酒」の儀礼への交代がもっと段階的に、いくつかの画期を経て果たされた可能性について検討する余地がある。

そこで以下では、青銅酒器の出現と変遷を確認し、墓における酒器の組合せと副葬位置に基づいて酒器どうしの関係性を再検証したうえで、青銅器紋様の解釈や甲骨文字に基づく殷王朝の祭祀についての研究を手がかりに、殷王朝の祭祀における「醴」の儀礼の役割とその変容について考えてみたい。

2. 殷の青銅酒器と「醴」

殷代前期、いわゆる二里岡期に使用された青銅酒器には、二里頭期から受け継いだ温酒器の爵・盃・斚、新たに青銅器化された飲酒器の觚、および盛酒器に分類される尊と卣がある（樋口 2011、内田 2023）。ここでは、内田純子が行ってきた一連の青銅酒器の型式編年に基づき（難波 1989・1990・1995・1996、唐・難波 1999）、早くに青銅器化された温酒器の爵と斚、および醸酒や保存にかかわる尊と卣を対象に、殷代前期の酒器の特徴と殷代後期に至るまでの通時的な変遷を確認しておきたい。なお、本稿では従来の二里岡下層一期・二期および上層一期・二期を二里岡一期から四期と通して殷代前期、鄭州白家庄期と洹北商城前期・後期（一期・二期）に代表されるいわゆる中商期を殷代中期、殷墟期を殷代後期とする。

（1）爵と斚

容器類の中では最も早く二里頭三期に青銅器化された爵は、頸部と腹部が明瞭に分かれた平底爵で、これらの特徴は二里岡期にも受け継がれるが、流の長さや背の高さに大きな違いがあり、直接的な継承関係は明らかでない。内田氏は、腹部の形状と器身に占める比率によって爵を次の3つの型に細分している（図1）。

A 型 腹部が丸く張り出し、器身に対して腹部の占める比率が低い

B 型 腹部が丸く張り出し、器身に対して腹部の占める比率が高い

C 型 腹部と頸部の間にわずかな段差があり、腹部壁が直線的である

二里岡二期に A 型が出現した後、三期に A・B・C の各型に分化する。このうち、B 型と C 型が白家庄期に継承されるが、二里岡四期の A 型と C 型に単柱の型式があり、他の型式に先駆けて円錐形柱帽が採用されていることから、A 型の消失というより、長身化・丸底化の過程で各型の差異が弱まり、集約されていったと見るべきだろう。洹北二期から殷墟一期にかけて腹部の比率が高まり、腹壁が直線的になり、殷墟二期には頸部が消失した型式が見られるのも、C 型の影響を受けての変化であり、円錐形柱帽もしくは截頭円錐形柱帽を採用する B 型爵への集約と考えられる。

洹北一期になると、頸部と腹部の境界が無くなり、丸底化を遂げた D 型が出現する。白家庄期の B 型からの変化と考えられ、頸部が窄まり腹部と底部の境界が明瞭な型式から直壁で完全な丸底の型式へと変遷する。その背景には、底部を Y 字形に分ける 3 塊の外型を用いる技術から底部全体を

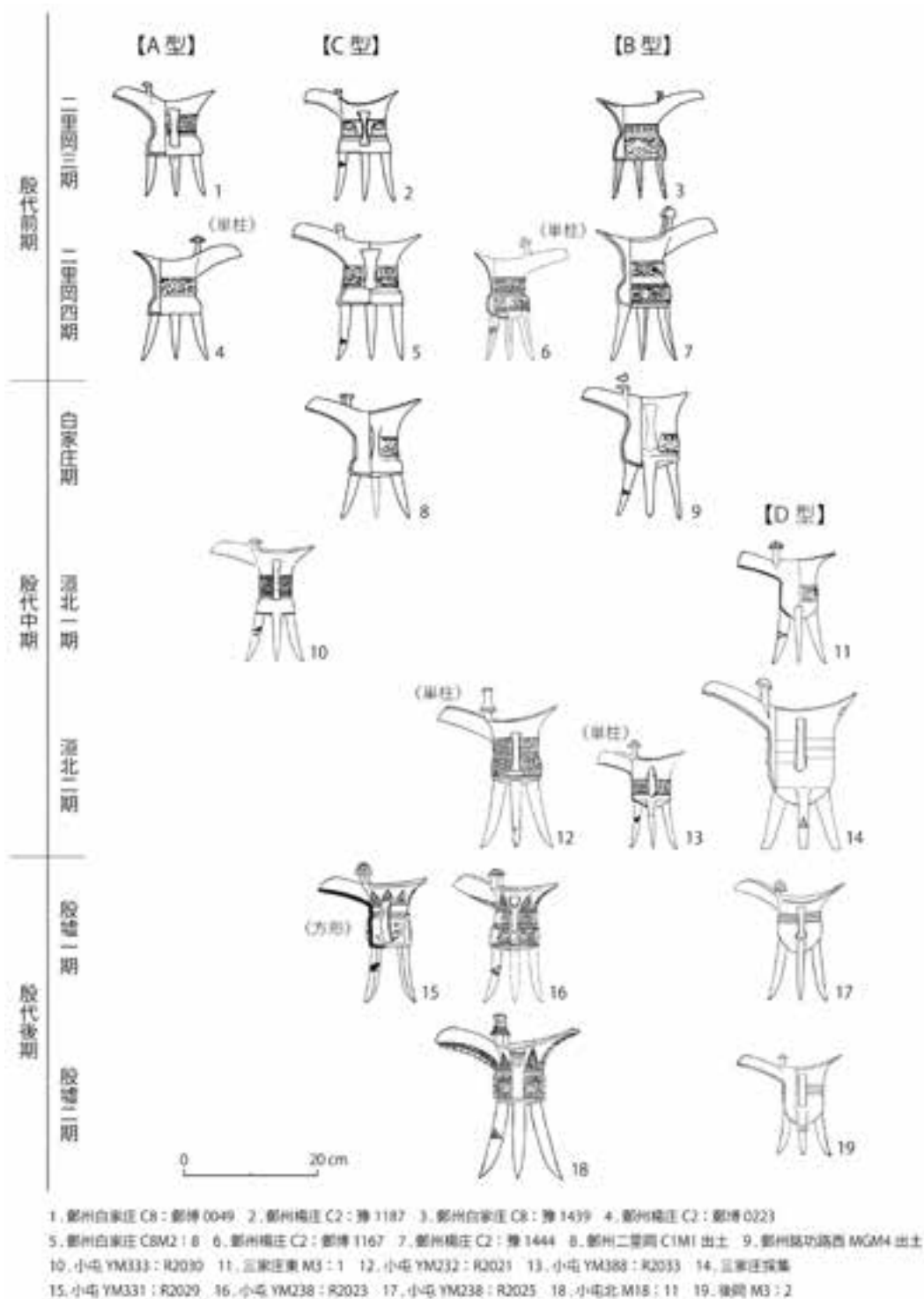
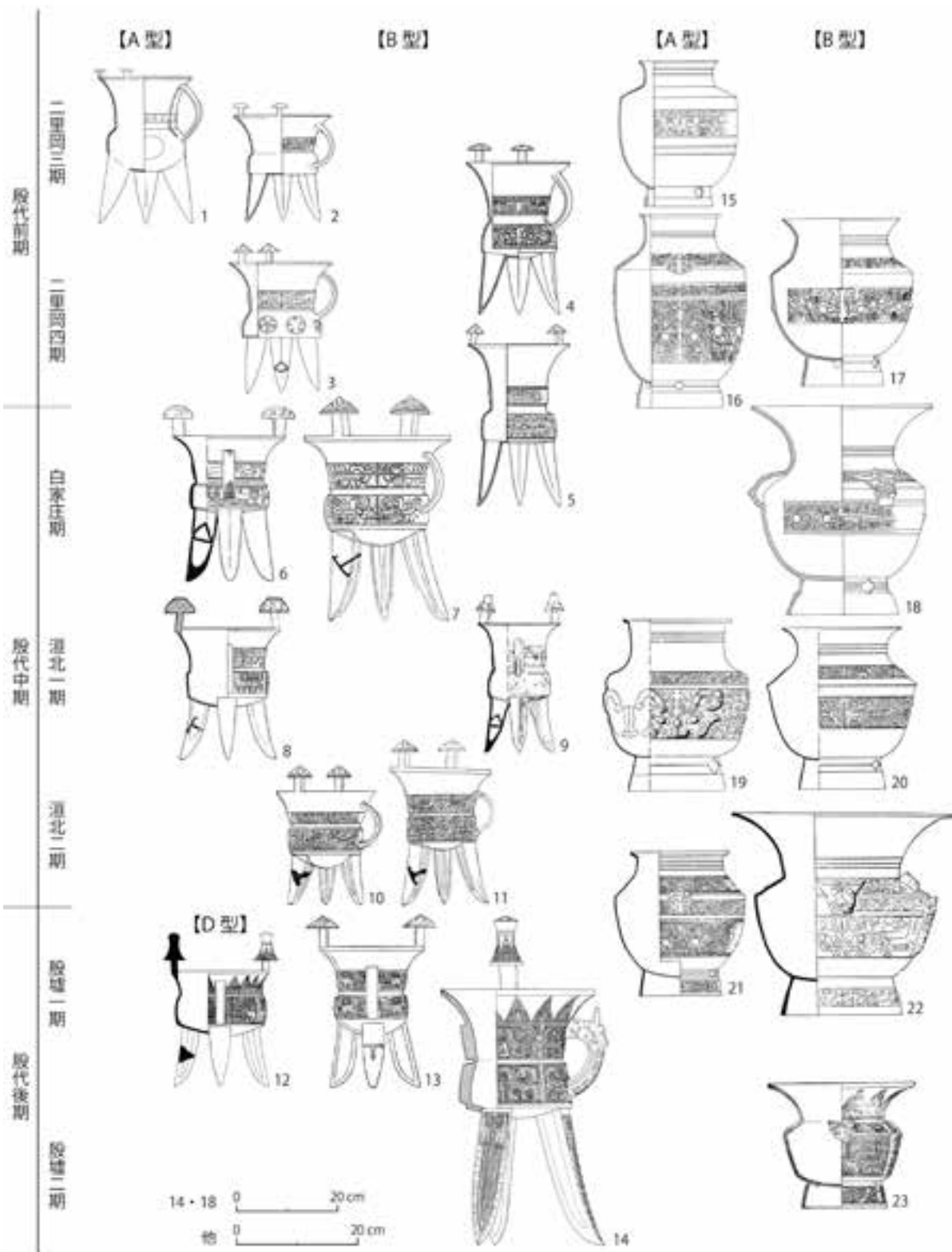


図1 銅爵の変遷



1. 鄭州白家莊 C8M3 : 4 2. 鄭州白家莊 C8 : 鄭博 0056 3. 鄭州白家莊 C8 : 鄭博 0057 4. 鄭州白家莊 C8 : 鄭博 0895 5. 鄭州饒周區 C9 : 鄭博 0156
6. 小屯 YM232 : R2038 7. 小屯 YM331 : R2043 8. 三家莊東 M3 : 3 9. 小屯 YM388 : R2047 10. 小屯 YM232 : R2039 11. 小屯 YM388 : R2046
12. 武官村 M1 : 4 13. 小屯北 M18 : 15 14. 殷墟 5 号墓 (婦好墓) : R57
15. 鄭州二里岡 C1 : 鄭博 0243 16. 鄭州肉陽區族食品隔 XH1 : 5 17. 鄭州白家莊 C8M3 : 9 18. 鄭州肉陽區族食品隔 XH1 : 4 19. 小屯 YM333 : R2060
20. 小屯 YM333 : R2059 21. 小屯 YM388 : R2061 22. 小屯 YM331 : R2070 23. 小屯北 M18 : 4

図2 銅罍・銅尊の変遷

覆う型と三足外面を覆う3塊の外型を用いる技術への鑄造方法の変化が指摘されている（唐・難波1999）。柱帽が円錐形か截頭円錐形に落ちつき、三足が高く外反して、流が断面V字形からU字形になるとともに先端に向けて緩やかに曲がるという変化は、B型・D型に共通する。

爵につづいて二里岡四期に登場した罍は、やはり頸部と腹部が明瞭に分かれる点が二里岡期にも受け継がれるが、三足の長さや形状、柱の構造などに明らかな違いがある。内田氏は、主に腹部以下の形状の違いによって次の3つの型に細分している（図2）。

A型 腹部が丸餅形で底部にかけて丸みを帯びる

B型 腹部が饅頭形で底部との境が明瞭に屈曲する

C型 腹部以下が鬲状をなす

このうち、B型が二里岡三期には主流となり、殷代中期・後期まで継承された。腹部を紋様で飾らないものと、腹部に円盤状突起や凹紋あるいは饗饗紋を飾るものに分かれ、柱帽は釘頭状の小さなものから斜面のなだらかな円錐形、さらに斜面が直線的で丈の高い円錐形へと変化する。腹部紋様の有無は、腹部が丸く張り出すか、直線的かの違いと相関しており、二里岡四期には腹壁が直線的で凹紋を飾る型式と、腹壁が直線的で饗饗紋を飾り、長頸化した型式が見られる。

白家庄期から殷墟前半期にかけての罍は、柱帽が円錐形で器の口径が広いものと柱帽が截頭円錐形で口径が狭いものとに区別される。洹北一期に腹壁が直線的で頸部との境に段をなすものが現れ、洹北二期には頸部と腹部の間の段差がほぼ無くなる。また、三足は二里岡期に見られた断面三角形の透底空足から、溝に型持を設けて足の内範を固定する方法を採用する断面T字形の不透底実足、そして内側の二面が溝状に凹む不透底実足への変化が想定される。殷墟一期には截頭円錐形の柱をもち、頸部が狭く、腹部が丸みを帯び、内側の二面が溝状に凹む実足を備えたD型も出現する。

（2）尊と卣

二里岡期に出現する銅尊は、いわゆる截頭有肩尊（A型）と口を大きく開いた円形尊（B型）とに分けられる。A型は大汶口文化の伝統を継ぐ二里岡文化の陶大口尊を模倣した形と考えられ（林1979）、B型は長江流域の硬陶尊との類似が指摘されている（内田2023）。筆者の目には、B型の口を大きく開き頸部でくびれた形は二里岡期の大口尊とそっくりに映る。A型・B型ともに頸部と圈足がしだいに高くなるとともに、頸部に紋様帯をもつようになり、肩部に犧首を飾る型式へと発展する。

殷代中期以降にもA型とB型が引き継がれ、腹部の傾斜が少なくなり、圈足は高く片持が設けられる上段が狭くなり、下段との段差が無くなっていく。殷墟一期には圈足上段と下段の境界が無くなり、殷墟二期には腹部・圈足がともに直線的で角ばったものへと変化する。横断面方形で圈足の発達したC型（方尊）の出現もそれに対応する事象であろう。二里岡期にすでに圈足上段の片持が十字形から円形に変わったものが見られるが、例外的であり、洹北二期並行に至って方形の片持が主流となる。片持の設置箇所も鑄型の中央から鑄型合わせ目へと変化する。

卣は、すばまった頸と膨らんだ腹部の下に圈足がつく器身に、蓋がつき、提げるための把手（提梁）を備えた器である。これには異論もあるが（林1979）、第一節に述べたようにこの器が卣鬯を保存

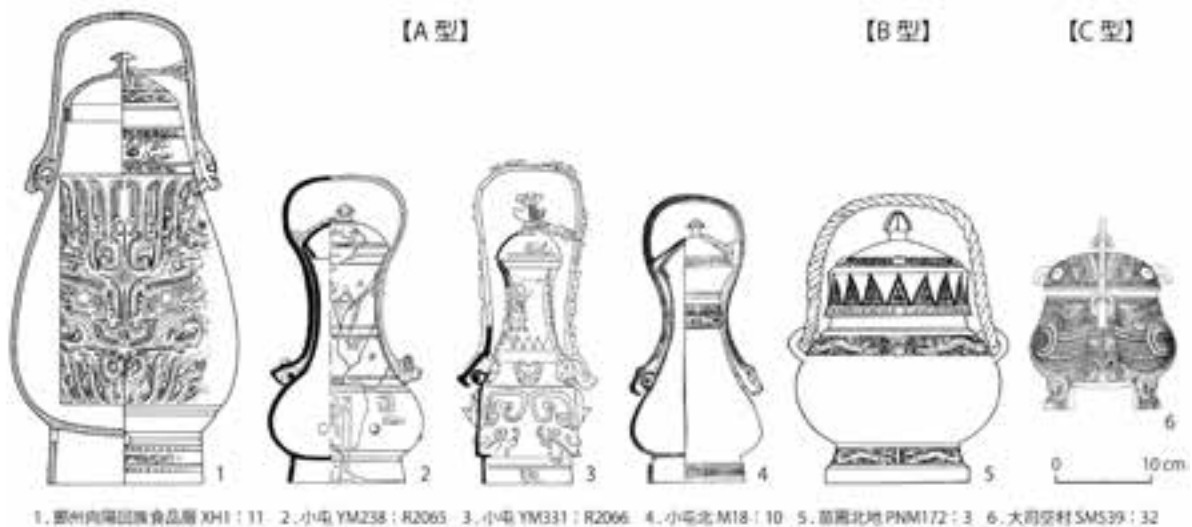


図3 銅卣の諸型式

するために用いられた可能性は高まっている。内田氏は、卣を形態の差異によって次の3つの型に細分する（図3）。

A型 平面形（水平断面形）が円形でとくに細頸のもの

B型 平面形が楕円形で全体が太いもの

C型 二羽のフクロウが背中合わせに合体した形状のもの（鴟鶚卣）

二里岡期に出現する卣は背が高く頸部から腹部にかけてなだらかにふくらむ形状をしており、内田氏はB型に属するというのが、平面形は円形であり、湖北省の盤龍城李家嘴1号墓の出土品にもやはり平面円形でこれより頸の細い卣があるから、A型卣の祖型と見るのが良いのではないだろうか。今のところ殷代中期の例は知られず、殷墟一期にA型卣やその平面形を方形にした例が現れる。B型卣は西北岡（HPKM）2046号墓や苗圃北地（PNM）172号墓など殷墟三期に例があり、C型卣は殷墟二期の大司空村539号墓例が知られている（鄭・陳1985）。

（3）酒器の革新

酒器の変遷史において、三足器の爵や斚が早くに青銅器化を達成し、次いで醸酒用の尊や飲酒器の觚が青銅器化したのはごく自然な流れに思える。ただし、酒を温めるという金属器の性質を活かした爵・斚と異なり、醸酒は陶大口尊でも事足りたであろうし、飲酒に関しては陶觚でも不都合は生じない。この点において、銅尊の出現は青銅製の酒器のセットの整備、すなわち「禮」の儀礼の確立を意味する画期であり、また陶器にはなかった卣という器種が、おそらくは壺からの発展ではあるが、青銅器として現れるのも、酒の儀礼の変革をあらわす重大な画期と評価しなければならない。

洹北一期における爵の丸底化、および斚に生じた透底空足から不透底実足への変化は、殷代前期から中期にかけての酒器の継承と断絶を如実に示している。前期から中期に酒器が受け継がれるなかで、爵と斚に革新が起こり、後期にかけて再びの銅卣の台頭を見たのは、酒器を用いた儀礼になんらかの変化が生じたからであろう。

3. 酒器のセットと「醴」の儀礼

前節で確認した爵・罍・尊・卣の各器種の変遷と画期をふまえ、ここでは墓での共伴事例と副葬位置によって酒器どうしの関係を確認し、酒器のセットの変遷について再検討したい(図4)。表1には、中小型墓で一定数の青銅酒器が出土した代表的事例を墓坑面積とあわせて列挙した⁽²⁾。器種名の右の数字は2点以上出土した場合の数を示している。各墓の時期は、従来の殷代青銅器の分期と組合せに関する主要な研究(唐・難波 1999、岳 2006、楊・楊 1985)に基づいている。

殷代前期の鄭州白家庄3号墓では、墓坑二層台上の南西部(頭位は北)に尊・罍・爵・觚がまとめて置かれており、酒器のセットの成立が認められる。それらの酒器の共伴関係は洹北一期・二期並行とされる小屯丙区の333号墓や南組の232号墓にも認められるが、小屯333号墓では尊2が椁室南西部(頭位は北)、罍・觚が同南東部、罍・爵2・觚が同北西部に分けて置かれていた。罍・爵・觚のセット関係が認められる一方で、尊はそこに加わらず、盛食器である鼎2とまとめられている。また小屯232号墓では、尊・罍2・爵・觚2が椁室南東部にまとめて置かれる一方で、爵1点は椁室南西部から出土した。尊の数や爵・罍・觚とのセット関係の規制は、比較的緩やかであったと言える。

殷墟一期の小屯331号墓では、卣・尊・罍2・觚3が椁室南側に、爵がそのやや北に、尊2・罍・爵2が椁室北東部に置かれていた。卣が酒器のセットに加わる一方で、それとは異なる酒器のセットが認められる。小屯333号墓・232号墓や331号墓では、出土する罍に透底空足と不透底実足の二種類が混在する点にも注意が必要だが、二種の罍の別と他の酒器との組合わせに相関は認められない。

つづく殷墟二期の小屯北18号墓では、卣・尊・罍2・爵2・觚3が椁室南西部(頭位は北)に、尊・爵・觚が椁室東側に置かれていた。殷墟三期の王裕口村南地94号墓では、尊・爵・觚のうちの尊が棺内東側(頭位は東)に、爵と觚は棺内西側に置かれていた。一方、同じく殷墟三期の范家庄東北4号墓では、棺内北側(頭位は北)に卣・爵2・觚2がまとめて置かれており、殷墟四期の西区269号墓では、椁室南東部(頭位は南)に卣・尊・罍・爵2・觚がまとめられていた。尊・罍の有無にかかわらず、卣は爵・觚とセットとして扱われている。

以上をふまえれば、尊の銅器化にあわせて早々に成立した尊・罍・爵・觚の酒器のセットは、従来指摘されてきた通りに「醴」の儀礼容器のセットと認めて良いだろう。また、卣を筆頭とする酒器のセッ

トの確立が黒黍の「酒」の儀礼の台頭を意味する点についても異論はない。ただし、殷代を通じて醸酒器の尊と他の酒器との結びつきは緩やかで、殷墟一期以降における卣と爵・觚との結びつきの方が強固であると言える。尊が卣筆頭のセットに加わる事例が認められ

表1 殷前期から後期の酒器副葬の代表例

墓葬	時期	面積	酒器
鄭州白家庄C8M3	二期四三期	3.4 m ²	尊・罍・爵・觚
小屯YM333	洹北一期並行	4.8 m ²	尊2・罍2・爵2・觚2
小屯YM232	洹北二期並行	7.8 m ²	尊・罍2・爵2・觚2
小屯YM331	殷墟一期	6.1 m ²	卣・尊3・罍3・爵3・觚3
小屯北M18	殷墟二期	2.5 m ²	卣・尊2・罍2・爵5・觚5(・觥)
王裕口村南地M94	殷墟三期	10.1 m ²	尊・爵・觚
范家庄東北M4	殷墟三期	7.0 m ²	卣・爵2・觚2
西区M269	殷墟四期	4.1 m ²	卣・尊・罍・爵2・觚



図4 墓での副葬位置にみる酒器のセット関係

る点も考慮すると、尊は第一節でも指摘したように「醴」に限らず「酒」の醸造に用いられた場合もあったと思われ、酒器のセットの中では醸酒器の尊の重要性はさほど高くなかったとも考えられる。一方で、殷墟一期以降にも卣のセットとは別に尊・罍・爵あるいは尊・爵・觚のセットが副葬される事実は、「酒」の儀礼が始まって「醴」の儀礼がただちに衰退はせず、「醴」の儀礼から「酒」の儀礼への交代が緩やかに進んだ可能性を想起させる。

4. 結論 — 「醴」の祭祀の変容

以上のように、殷代前期に成立した「醴」の儀礼は、「酒」の儀礼が台頭した後もただちには衰退せず、しかし殷墟二期を境にその地位を譲るに至った。その背景には何があったのか。最後に、酒器の紋様とその意味についての議論や、殷墟卜辞に基づく王朝祭祀についての研究を手がかりに、殷王朝の祭祀における「醴」の儀礼の役割と「酒」の儀礼確立後の祭祀の変容について考え、結びとしたい。

二里岡二期に青銅器化を果たした爵が二里頭文化の爵と決定的に異なる点は、頸部紋様帯の有無である。はじめは単純な珠紋を施すのみであったが、二里岡三期になるといわゆる饗餮紋が施され、爵・罍ともに頸部と腹部に二段に紋様帯をもつ型式が現れる。青銅器化にあわせて出現した紋様は、当然ながら「醴」の儀礼において重要な意味をもつだろう。

「饗餮紋」の呼称は、宋・呂大臨の『考古図』(元祐七年:1092)に始まり、それは『呂氏春秋』(秦・呂不韋撰)先識覽の「周鼎に饗餮を著す。首あり、身なく、人を食らいて未だ咽まずして害其の身に及ぶ」(「周鼎著饗餮、有首無身、食人未咽、害及其身」)を根拠としている。今でもその呼称を継承し、青銅器に見られる獣面紋を慣習的に「饗餮紋」と呼ぶが、この紋様が饗餮のような凶兆でないことは、すでに林巳奈夫が明らかにした通りである(林 1984a・1993)。

林氏の説によれば、いわゆる饗餮紋とは、『左伝』宣公三(606)年に「昔は夏の方に徳ありて、遠方に物を図させ、金九枚を貢がせ、鼎を鑄て物に象どらせ、物は百たりて為に之備わり、民をして神(善神)・姦(悪神)を知らしむ」(「昔夏之方有徳也、遠方図物、貢金九枚、鑄鼎象物、百物而為之備、使民知神姦」)と記される「物」のうち、他よりも明らかに格の高い扱いを受ける神すなわち殷王朝の「物」とされる。その饗餮紋の額には、河姆渡文化や良渚文化の玉器に見られる太陽神の三尖形飾りに由来する篋(へう)形とそれを挟む一對の羽の形が象られている。これは『説文解字』に「朝会にて茅を束ね、位を表すを蕝と曰う。……春秋国語に曰く、茅蕝を致して坐を表す、と」(「蕝、朝会束茅表位曰蕝。……春秋国語曰、致茅蕝表坐」)と解される「蕝」の形であり、「帝」字の上部を構成してもいる。すなわち、いわゆる饗餮紋の正体は太陽神に由来し、自然神＝遠祖神として祭られた殷王朝の「物」すなわち「帝」である、と。

殷墟卜辞によると、帝は雨・風・暵(旱)や災禍を降ろすか、あるいは征伐の祐護、作邑の聴許など、その意志に関することは卜問されるが、それに対する直接的な祭祀は行われなかったとされる(赤塚 1977、林 1984a)。帝の聴許を必要とする政務のひとつの作邑すなわち人民の居住する邑を作ることは、省方の一環として行われ、臣僚のほかに選定された族長および諸族を率いてその地に臨み、

籍田礼を行う場所・人選・部署を定め、王自身は邑を作る場所を確定してその地の祐に祈り、その後には河・雝のほか先公・先王など上下の諸神を祭り、籍田礼も含む大規模な祈年祭が行われた（赤塚 1977）。

籍田礼とは、『礼記』祭儀に「是の故に昔は天子為に千畝を藉し、冕して朱紘（赤い紐）し、躬ら耒を乗る。諸侯は為に百畝を藉し、冕して青紘し、躬ら耒を乗る。以って天地・山川・社稷・先古に事え、以て醴酪・齊盛を為るに、是に於いて之を取る。敬の至なり」（「是故昔者天子為藉千畝、冕而朱紘、躬耒耜。諸侯為藉百畝、冕而青紘、躬耒耜。以事天地・山川・社稷・先古、以為醴酪齊盛、於是乎取之、敬之至也」）と記されるように、自然神や先王などの諸神を祭るための醴や盛（穀物）をつくるに際し、天子や諸侯自らが田を耕す農耕の祭礼である。

『国語』周語に、周・宣王が籍田礼を行わず、そのために姜戎に敗れたという記事がある。そこでは、「時に先だつ五日、瞽の告ぐるに協風の至あらん、と。王齊宮に即き、百官・御事各々其の齊に即くこと三日。王乃ち淳濯して醴を饗く。期に及び、鬱人は鬯を薦め、犧人は醴を薦め、王は鬯を裸し、醴を饗けて乃ち行く。百吏・庶民畢く従う」（「先時五日、瞽告有協風至。王即齊宮、百官御事、各即其齊三日。王乃淳濯饗醴。及期、鬱人薦鬯、犧人薦醴、王裸鬯、饗醴乃行、百吏庶民畢従」）とあるように、籍田の礼に醴を供えるだけでなく鬯を裸することが加わっている。

同様に、『礼記』表記にも「天子親ら耕し、粢盛・秬鬯以て上帝に事う」（「天子親耕、粢盛秬鬯以事上帝」）とあり、上帝を祭るのに秬鬯が用いられている。思うに、籍田礼においては、本来は前年に植えた穀物でつくった醴を供え、帝を祭ってその年の豊作を祈ったのであり、そこに鬯を裸することが加わったのは、西周時代までに帝よりも先公・先王を祭ることが盛んになったからではないか。

ここで酒器に話を戻すと、二里岡二期の青銅器化を経て、二里岡三期の爵や罍にいわゆる饗饗紋が施されたのは、それらが籍田礼を含む祈年祭における醴の儀礼に用いられたからであろう⁽³⁾。天が雨を降らせ、四季を運行させることで穀物の豊穡が叶ったのであり（林 1953）、帝の意志に基づいてそれらを実行したのが鳳や龍などの諸神であった。だからこそ、天の降ろす雨の力で生育した穀物や酒・肉を盛って祭祀に供する器にいわゆる饗饗紋すなわち「帝」紋が施され、その脇に鳳や龍が配せられたと考えられる。

二里岡三期に出現した尊や卣にも饗饗紋は施されており、やはり帝を祭る器としてつくられたと知られる。ただし、この段階から罍・爵とのセット関係が確かめられる尊と異なり、卣が墓で他の酒器とセットをなす事例は確認できない。卣の出現が「酒」の儀礼のはじまりを意味するなら、すでに祈年祭ないし籍田において「酒」の儀礼が始まっていた可能性はあるが、あくまで「帝」を頂点とする祭祀の体系に先公・先王を祭る儀礼が加わった段階であろう。

同様に、殷墟一期に再出現した卣にも饗饗紋が施されるから、この段階においても帝の祭祀は継続していたと考えることができる。一方、殷墟三期以降に見られるB型卣では、頸部と腹部の間の狭い紋様帯に鳳紋や龍紋を展開し、その中央に犧首を飾るのみである。この犧首の獣面の額に菱形や窠形飾をつけたものがあり、それが饗饗紋を一段降格させた神であることはすでに林氏が指摘するとこ

ろであり（林 1984a）、B 型卣では腹部の最も目立つところを無紋にすることで帝を敬遠しているといしか考えられない。殷墟三期以降、卣が必ず爵・觚とセットで副葬される事実も考慮すれば、祭祀における「醴」の儀礼から「酒」の儀礼への変化、つまりは帝を敬遠し、直接的には先公・先王を祭るような変化が生じたと理解できよう。

ここで、あらためて殷墟卜辞の研究を参照すると、武丁期の甲骨には帝が多様な権能をもつ神として崇拜され、降雨の命令・収穫の多寡・干魃の発生・戦争への佑助・邑の存滅など様々な事項にかかわって占われる一方、祖己以降の甲骨文字には帝だけでなく自然神への信仰が減少し、祖先神への祭祀だけが維持されたことが明らかにされている（落合 2012）。殷墟侯家庄西北岡大墓のうち、1001 号墓（HPKM1001）を武丁の墓とみなす従来説（楊 1981・谷 1994）に対して、近年には墓どうしの位置関係を考慮して 1400 号墓（HPKM1400）を武丁の墓とする研究が示されており（Mizoguchi & Uchida 2018）、未だ決着を見ていない。しかし、少なくとも殷墟二期までは「醴」の儀礼すなわち帝への祭祀が続いており、王統分裂以前すなわち祖乙以前の帝崇拜ないし自然神崇拜が分裂後の洹北商城および殷墟に継承され、武丁期において盛行したと考えられる。そして、殷墟三期以降の「醴」の儀礼セットの衰退は、自然神祭祀の減少を背景としているだろう。

『礼記』明堂位の「殷は醴を尚び、周は酒を尚ぶ」という記述はいささか極端ではあるが、殷前期にすでに「醴」が尚ばれ、武丁の時代に至って最盛期を迎えた点や、祭祀に取り込まれた「酒」が殷墟三期以降に「醴」よりも尚ばれるに至った点は、ある程度実態を反映している。本稿では爵・斚・尊・卣を対象を絞ったが、飲酒器の觚や觶を含め、さらに西周時代にも話を広げることで、酒を用いる儀礼と祭祀の変容をより詳しく論じることができるだろう。今後の課題としたい。

付記

本稿は 2012 年 3 月に京都府立大学に提出した卒業論文「古代中国における儀礼の変遷と画期 一二里頭文化・二里岡文化を中心として」を下地とし、その後の関心の広がりを受けて大幅改稿したものである。その間に発表された内田純子氏（中央研究院歴史語言研究所）の研究（内田 2013・2023）には筆者の関心と重なるところが多く、本稿でも大いに参照・引用させていただいた。修士課程以降に受けた多くのご教示も含め、ここに深謝したい。

註

- （1） 清・段玉裁『説文解字注』に『周礼』酒正注曰、醴猶体也、成而汁滓相将、如今恬酒矣。按汁滓相将、蓋如今江東人家之白酒。滓即糟也。滓多、故酌醴者用枬。醴甘、故曰如今恬酒。恬即恬也。許云一宿孰、則此酒易成与」とある。
- （2） 白家庄 C8 3 号墓からは報告書によれば銅爵と別に銅爵流が出土しており、銅爵が 2 点納められた可能性があり、また小屯北 18 号墓の爵足 2 は酒器のセットとは離れた位置から出土した。なお、小屯 232 号墓から出土した觚のうちの 1 点は遺構図では出土位置が判然とせず、小屯北 18 号墓の觚のうちの 1

点も遺構図に出土位置が示されない。

- (3) 貝塚茂樹は、いわゆる饗饗紋の頭上に水牛や羊の角が象徴的に描かれているのを、殷人が祖先を祭祀するときに犠牲として捧げた神聖なる家畜であったからであり、犠牲を供せられ、その血をすすり肉を食うことによって更新される祖先の霊威をあらわすと指摘する（貝塚 1971）。

引用・参考文献

- 赤塚 忠 1977 「甲骨文に見える神々」『中国古代の宗教と文化—殷王朝の祭祀—』角川書店
- 内田純子 2013 「商代的酒器与青銅礼器」『金玉交輝—商周考古 芸術与文化論文集』（中央研究院歷史語言研究所會議論文集之十三）中央研究院歷史語言研究所 2013 年
- 内田純子 2023 『中国殷代の青銅器と酒』（アジアを学ぼう 60）風響社
- 落合淳思 2012 『殷代史研究』朋友書店
- 貝塚茂樹 1971 『中国の神話—神々の誕生』筑摩書房（講談社学術文庫版 2023 年）
- 河南省文化局文物工作隊 1959 『鄭州二里岡』科学出版社
- 河南省文物考古研究所 2001 『鄭州商城 1953-1985 年考古発掘報告』文物出版社
- 河南省文物考古研究所・周口市文化局 2000 『鹿邑大清宮長子口墓』中州古籍出版社
- 河北省文物研究所 1985 『藁城台西商代遺址』文物出版社
- 岳 洪彬 2006 「殷墟青銅礼器組合研究」『殷墟青銅礼器研究』（第五章）中国社会科学出版社
- 谷 飛 1994 「殷墟王陵問題之再考察」『考古』1994 年第 10 期
- 石 璋如・董 作賓 1973 『小屯』第一本（丙編三・殷墟墓葬・南組墓葬附北組墓補遺）中央研究院歷史語言研究所
- 石 璋如・董 作賓 1980 『小屯』第一本（丙編五・殷墟墓葬・丙区墓葬・上）中央研究院歷史語言研究所
- 中国社会科学院考古研究所 1999 『偃師二里头 1959 年～1978 年考古発掘報告』中国大百科全書出版社
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1979a 「1969-1977 年殷墟西区墓葬発掘報告」『考古学報』1979 年第 1 期
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1979b 「安陽武官村北的一座殷墓」『考古』1979 年第 3 期
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1981 「安陽小屯村北的兩座殷代墓」『考古学報』1981 年第 4 期
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983 「安陽殷墟三家庄東的発掘」『考古』1983 年第 2 期
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 2009 「河南安陽市殷墟范家庄東北地的兩座商墓」『考古』2009 年第 9 期
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 2012 「河南安陽市殷墟王裕口村南地 2009 年発掘簡報」『考古』2012 年第 12 期
- 中国社会科学院考古研究所安陽隊 1993 「1991 年安陽后岡殷墓的発掘」『考古』1993 年第 10 期
- 中国社会科学院考古研究所二里头隊 1983 「1980 年秋河南偃師二里头遺跡発掘簡報」『考古』1983 年第 3 期
- 張 徳水 1994 「殷商酒文化初論」『中原文物』1994 年第 3 期
- 鄭 振香・陳 志達 1985 「殷墟青銅器的分期与年代」『殷墟青銅器』文物出版社
- 鄭 振香・陳 志達 1994 「青銅器類別」『殷墟的発現与研究』（捌 殷墟出土的文化遺物・二 〈三〉）科学出版社
- 唐 際根・難波純子 1999 「中商文化の認識とその意義」『考古学雑誌』第 84 卷第 4 号
- 難波純子 1989 「初現期の青銅彝器」『史林』第 72 卷第 2 号
- 難波純子 1990 「殷墟前半期の青銅彝器の編年と流波の認識」『史林』第 73 卷第 6 号
- 難波純子 1995 「殷墟後半期の青銅彝器（上）」『泉屋博古館紀要』第 11 卷
- 難波純子 1996 「殷墟後半期の青銅彝器（下）」『泉屋博古館紀要』第 12 卷

- 花井四郎 1992 「黄河文明の酒」『黄土に生まれた酒—中国酒 その技術と歴史』（東方選書 20）東方書店
- 林巳奈夫 1953 「殷周銅器に現れる龍について」『東方学報』第 23 冊
- 林巳奈夫 1979 「中国古代の酒甕」『考古学雑誌』第 65 巻第 2 号
- 林巳奈夫 1984a 「所謂饗餐紋は何を表はしたものか—同時代資料による論証—」『東方学報』第 56 冊
- 林巳奈夫 1984b 「殷、西周時代礼器の類別と用法」『殷周時代青銅器の研究』吉川弘文館
- 林巳奈夫 1993 「饗餐=帝説補論」『史林』第 76 巻第 5 号
- 樋口隆康 2011 『中国の古銅器』学生社
- 松丸道雄 1970 「殷周国家の構造」『東アジア世界の形成 I』（岩波講座 世界歴史 4）岩波書店
- 孟 憲武 2003 「安陽三家庄 董王度村発現的商代青銅器及若干問題的討論」『安陽殷墟考古研究』中州古籍出版社
- 楊 錫璋 1981 「安陽殷墟西北岡大墓の分期及有關問題」『中原文物』1981 年第 3 期
- 楊 錫璋・楊 宝成 1985 「殷代青銅礼器の分期与組合」『殷墟青銅器』文物出版社
- 李 濟 1948 「記小屯出土之青銅器」『中国考古学報』第三冊
- Koji Mizoguchi and Junko Uchida 2018 The Anyang Xibeigang Shang Royal Tombs Revisited : a Social Archaeological Approach, *Antiquity*, Vol.92, No.363

図表出典

図 1 筆者作成（各器の出典を以下に示す）

1～9. 河南省文物考古研究所 2001 10・12～13・15～17. 李 1948 11. 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983（以下、安陽○○とする）14. 孟 2003 18. 安陽 1981 19. 安陽 1993

図 2 筆者作成（各器の出典を以下に示す）

1～5・15～18. 河南省文物考古研究所 2001 6～7・9～11・19～22. 李 1948 8. 安陽 1983 12. 安陽 1979b 13. 安陽 1981 14. 鄭・陳 1985 23. 安陽 1981

図 3 1. 河南省文物考古研究所 2001 2・3. 李 1948 4. 安陽 1981 5・6. 楊ほか 1985

図 4 1. 河南省文物考古研究所 2001 2・4. 石・董 1980 3. 石・董 1973 5. 安陽 1981 5. 安陽 2012 6. 安陽 2009 7. 安陽 1979a